

紅葉狩

長唄

全詞章

本名題「色見草月盃」

能「紅葉狩」に取材

物思ふ立ちまふべくもあらぬ身の、袖うちふりし心まで
うつらふ秋の色みえて、此の身を何とゆふまぐれ

時雨るる空を眺めつつ、浮れ出でたる道の辺の、草葉もともに下紅葉

夜のまの露や染めぬらん

面白や頃は長月末つかた、四方の梢もいろいろに、錦彩どる山々は、花の吹雪のそれならで
五色の雪と降る紅葉、分けつつ行くや益荒夫の、矢猛心の梓弓、ひくや知るべの駒の足、涙に
川の流れ絶えせぬ紅葉葉を、渡らば錦中絶えん、時雨を急ぐ紅葉狩

見捨て玉ふかつれなやと、袂にすがり止むれば、流石岩木にあらざれば

心弱くも引とめられて、所は山路の菊の酒、汲むや流のうき身にも、いとし可愛のよい
殿御ぶり、ほんにお前を誰が抱て、ぬるでの紅葉色見草、他所の恋路のねたましや

そもや誠が露程あらば、二世も三世も神かけて、忘るる隙はないわいな

深い縁も月に雲、花に嵐の恋すなる、月の盃さす袖も、雪をめぐらす舞の曲

秋の木の葉の色に出し、紅葉踏む鹿憎いといへど、恋の文かく筆となる、

かはゆらしいぢやないかいな

秋の千草の色に出し、菊と薄は中よいけれど、露がしらせて濡を知る、

可愛らしいぢやないかいな、アアうらやまし

今まで爰に色ある女忽化生の形を現はし、紅葉の梢も火炎となつて、枯木木の
葉もさらさらさら、めざましかりける次第なり